李樹廷と日本キリスト教との関係[1]

徐（ソ）　正敏（ジョンミン）

目　次

1. 序論 ── 李樹廷研究の土台としての日本キリスト教
2. 李樹廷の渡日経緯と活動概要
3. 李樹廷の活動当時における日本のキリスト教の状況
4. 李樹廷と日本キリスト教界の人物
　1）津田仙
　2）内村鑑三
　3）安川亨
　4）ノックス（G. W. Knox）とルーミス（H. Loomis）などの日本駐在宣教師
5. 李樹廷と「日本基督教大親睦会」（1883）
6. 結論 ── 李樹廷と日韓キリスト教関係史の変遷

1. 序論
── 李樹廷研究の土台としての日本キリスト教

朝鮮末期の状況下において，最も具体的に開化，開放を実践しようとした朝鮮の政治グループは，日本と関わりつつ活動した諸人物であると言える。代表的な人物として，まず甲申政変の主導者である金玉均（キムオッキュン），朴泳孝（パクヨンヒョ）をあげることができる。彼らは，キリスト教を個人的信仰として受け入れなかったものの，朝鮮の開化，開放の必要性とキリスト教の有効性を主張した人物である。特に朴泳孝は，甲申政変に失敗し日本に亡命，そしてアメリカ往来した後に日本最初のキリスト教学校である明治学院初の朝鮮人留学生として英語を学んだ経歴もある[2]。一方，福沢諭吉（慶應義塾の設立者）の助けで朝鮮人留学生のための「親隣義塾」が設立されたが，彼の周辺にいる日本の近代化論者，宣教師なども協力に加わった[3]。後の出来事として，いわゆる「朴泳孝大統領説」と「独立協会解散事件」（1898 年）に多数の開化政治家が関わり，政治犯として漢城監獄に収監された知識人たちが集団でキリスト教に改宗することになる。彼らを朝鮮最初の官僚社会におけるプロテスタント受容者として評価できるが，そのほとんどが朴泳孝を含む 1884 年前後の日本亡命者と間接的に関係を持っていた[4]。

朴と直接的な関係を持ち，朝鮮のキリスト者として一翼を担った人物がまさに李樹廷（イスチョン）である。李樹廷のキリスト教受容は，朝鮮プロテスタント史において知識人階層の受容においてその中心軸を成す。ここでよく比較されるのが，満洲でのキリスト教の受容過程である。すなわち，徐相崙（ソサンユン）など『ロース訳聖書』の翻訳者によるキリスト教受容のルートが「民衆階層における受容」という特性を持っていることとは異なり，日本を拠点とした

李樹廷などのキリスト教受容過程は，「両班・知識人における受容」という特性を持っている。

朴泳孝

このように，李樹廷は朝鮮プロテスタント史において最初の知識人キリスト者の代表格である。今まで彼に関する研究は，その生涯や活動，アメリカ宣教師による朝鮮宣教着手を勧告する宣教師誘致のための努力，そして特別な業績として聖書翻訳に関するテーマを中心に行われて来た。これらの研究は，朝鮮キリスト教受容史における李樹廷の立場を忠実にまとめ上げるテーマである[5]。

本論文では，李樹廷のプロテスタント受容活動の土台，すなわち「コンテクスト」（context）になる当時の日本，日本キリスト教，そして李樹廷と関わった日本の助力者たちを中心に考察する。これは，朝鮮キリスト教受容史において日本が持っていた役割を一つの重要な関係軸として，どのような意義を持つのかを明らかにする作業になると考える。

2. 李樹廷の渡日経緯と活動概要

朝鮮後期の 1876 年以降，朝鮮は日本と修交し何度か「修信使」を日本に派遣した。1881 年 4 月には「紳士遊覧団」が渡日し，その団員の一人である孫鵬九（ソンプングゥ）は日本に残って東京外国語学校の朝鮮語教師として勤めた。「紳士遊覧団」の他のメンバー安宗洙（アンゾンス）は近代的な農業問題に関心を持ち，著名なキリスト者農学者であった津田仙に出会った[6]。この二人の活動が李樹廷の渡日と日本での活動に直接的なモチベーションを与え，先行活動として大きな意義を持っている。

> 朝鮮人我外務省の案内にて，有名なる津田仙の宅に到り，農業の事を聴て悦びに堪へず，…（略）馬太伝 5 章が認めたる掛物を示して，昔論語贈られたる報恩いは燈火よりも輝く処の日光を贈るべしとの意を述べられたり　異客之を読で感佩惜く能はず，津田氏此幅を進ずべしと申されければ，異客之を辞して曰く，実に耶蘇教の徳あるを悟るが故に，帰国の上は必ず宗教の自由を国王に請願すべし。然れども今般予国を出るとき，必ず耶蘇教を携へて帰国せざるを誓たれば，暫く君家を預くべし[7]。

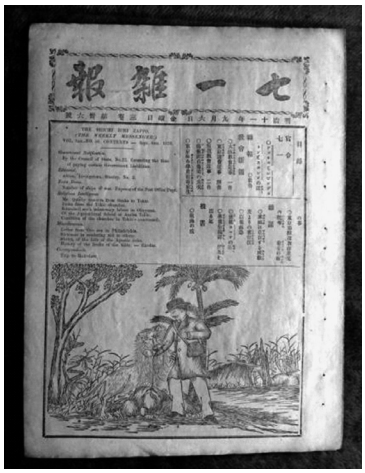
安宗洙と津田仙の最初の出会いを記録したものだ。近代農法を師事した安宗洙は，キリスト教を接する機会も同時に得ていた。その後，李樹廷は安宗洙が津田仙に会うことを願い，孫鵬九の後任として東京外国語学校の朝鮮語教師として活動した。李の渡日において，最も直接的な関係があったことは確かである。ついに李は，1882 年 9 月の「壬午軍乱」が鎮まった後，開化政権が派遣した朴泳孝を代表とする修信使節の一員となり日本に渡った。李樹廷が朴泳孝の使節団に参加し，その後日本にとどまり近代文物に接触，学習する機会を得たのは，「壬午軍乱」当時危険にさらされた王妃（明成皇后）を救った功労によるという記録と，彼の渡日，洗礼までの過程を記した史料が

日本にも伝えられている。これを大部分の研究者が活用して来た。すなわち，1883 年 5 月 11 日に発行された雑誌『七一雑報』[8] 第 8 冊 19 号（第 3 面）の内容である。この記録を現在まで李樹廷研究者がそのまま引用し，参考にして李の渡日経緯と日本でのキリスト教への入信，洗礼までの過程を研究してきた。ここで，この史料を整理することによって彼の活動をまとめる。

韓人受洗

朝鮮國人李樹建[9] といへる者去年内國騒乱[10] の際王妃を擁護り千苦万艱を経て之を田舎に隠し鎮静の後賞功の沙汰と蒙るべき所ろ朋友閔泳翌[11]（閔台鎬の男にて当時協辦総理内外機務大員なり）と謀り党員数名と共に或いは清國李鴻章の許に行き又日本に来りなどせしが李樹建は其中の首領にて前年までは宣略将軍なりしも今は其官を辞し日本に於て農学法律の二科を専ら修め又廣く我が國内の郵便運送などの実地と目撃経験する為同士五六輩と孜々奔走せる折柄偶々去十二月津田仙氏の誘引により築地のクリストマスの臨場され大に感ずる所ありて其後は長田氏に就て聖書の大意を学び又安川氏に就て仏教と聖教の異同を質問し終に去月二九日の安息日に東京露月町教会に於て安川氏より聖洗を受けられたり此李氏の叔父に天主教を信ずる者ありし偶々大院君が國内の天主教を〇戮せし時奮然として之を諌めしに大院君立どころに之を捕縛し初には両手を切り次に両股を切断し後四体を寸断にして死に至らしめ且其家産を没収せりと斯る迫害に遭し親族のあるにも係らず信心を起せしは実に敬虔の士と云ふべし朝鮮人の日本にて洗礼を受けしは此者と始とし朝鮮國内にてもプロテスタントにても此者が鼻祖なるべしとの事なりと東京より報知

因にいふ近頃西京デベス氏の所にも一の朝鮮人来りて其本国に伝道師を送らんことを乞ひたるよし該地にて伝道会社の集ありし節デベス氏より話ありたり[12]



この記録が当時，李の渡日に関する最も直接的な史料であるが，ただ朝鮮内の事情と関わる部分は他の史料との綿密な比較，検討が必要である。しかし，この雑誌の記録が李の日本滞在当時に発行されたことを考えると，李自らの陳述と事実関係を直接確認した記事として評価できる。したがって，現在にはこの史料が最も事実に近い渡日経緯に関する記録であることは確かだ。この記録は，本論文の論旨とは直接的な関係は薄いものの，当時同志社の教授であった「アメリカン・ボード」（American Board）の宣教師デーヴィスを訪ね，朝鮮への宣教師派遣を要請した朝鮮人が誰であり，その経緯は如何なるものだったのかに関する綿密な調査と研究が求められる。これは，もう一つの研究課題として残されている。特に「アメリカン・ボード」は会衆教会，すなわち日本組合基督教会（以下，組合教会）を設立した宣教支援団体であり，この組合教会は後に朝鮮での「植民地伝道」に尽力した，いわゆる「朝鮮伝道論」を遂行したという点でその歴史的「アイロニー」が大きい。

前述したの 『七一雑報』の一次史料を中心に，李樹廷の渡日経緯と改宗の背景，そしてその後の動向を簡潔にまとめた金テジュンの考察を紹介する。

1882 年（高宗 19，明治 15）年 9 月下旬に東京に来た李樹廷は，農業に関する研究を目的として日本農学界の代表的存在であった津田仙（1837-1908）に会ったが，彼を通してむしろキリスト教に入っていった。東京に来てから三か月，その年（1882 年）のクリスマスには津田仙の案内によって築地教会のクリスマス礼拝に参加，そこで信仰を告白し，翌年（1883）4 月末には露月町教会で安川亨牧師から受洗した。続いてアメリカ宣教師 G. W. Knox（長老教会），R. S. Maclay（メソジスト教会）などと親交を深め，清教徒精神に心酔した。また同年 5 月，東京新営教会で開かれた「日本全国基督教徒大親睦会」で李樹廷は母国語（朝鮮語）で祈りを捧げ，内村鑑三などに深い感銘を与えたと伝えられる。この時の記念写真には，韓服を着た李樹廷が海老名弾正，津田仙と並んで前列の中央に座り，新島襄と内村鑑三が二番目の列に見られるなど，40 人余りの基督教指導者たちとともにいた[13]。洗礼を受けてから二ヶ月後に，李樹廷は『懸吐漢韓新約聖書』の四福音書を翻訳し，翌年には『馬加福音』のハングル翻譯作業を完了した[14]。

また，李が『六合雑誌』に漢文で書いた朝鮮カトリック伝来の歴史に関する文章がある。これは 1883 年 8 月 14 日付けの『福音新報』（関西）[15]に再収録されている。これに関して『日韓キリスト教関係史資料』（1876-1922）は，次のように解説している。

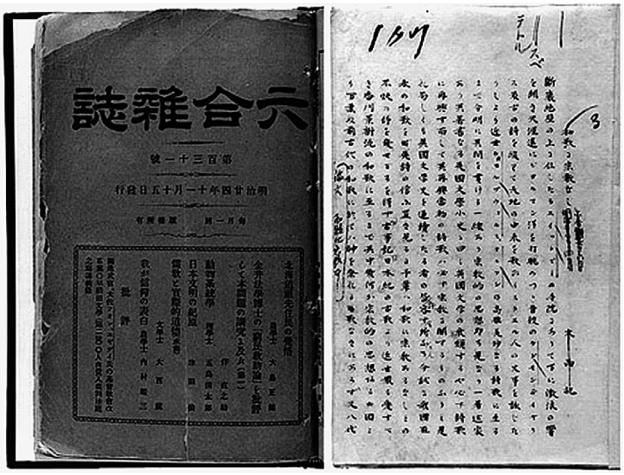
李樹廷が『六合雑誌』に漢文で発表した朝鮮天主教渡来の歴史を「婦女子のため」日本語で予約し『福音新報』（関西）1883 年 8 月 14 日に掲載された[16]。

李が来日していた当時，彼について詳しく扱った『七一雑報』（1883 年 6 月 1 日）には，すでに彼が朝鮮のカトリック迫害の歴史とその状況について述べた内容を詳しく報道している。その内容は次の通りだ。

朝鮮信者の殺害

此頃東京にて洗礼を受けられたる李樹廷と云る人の話を先頃朝鮮に於て天主教を信ずる者の漸次に殖しれば暴悪なる大院君は盡く之を殺戮んと思ひ探索を入て國中を掻集しに男女合せて百八十人を獲たり大院君は是らの者を盡く縛りて刑場に居併べ其首を斬まへ一人一人問ぬるに「爾今より耶蘇を信ずることを止にする乎止るとならば許すべし若止ぬといふならば只今此場にて刑を処すべし」と云に首坐の者答ふるよう如何に厳命なるとも霊魂には替がたければ命に従う〇事能はずと之に依て其首は忽まち地に落たり次の者とも亦その如く問掛しに同様従がはざりしかば斬れて其首を地に落され第三番目には八歳ばかりの童子なりしが此童子は目前に父母を殺されし者にて役人は此子に向ひ同じ尋をかけしに童子の答ふるやう父と母と既に殺されたれば仮令教を信じませずとも此世に生活へることを好ませんと其決断の確乎なるにより見物人の中に信仰を起すものあるに至れり而て此百八十人終に殺されたれども信者は愈増加せりと[17]

これは李の家族の来歴とも関連があるが，李自


六合雑誌

第百三十一號

明治廿四年十一月十五日發行

毎月一回　販賣所有

らがカトリック教会についてすでに強い関心を持っていたことを証明している。それだけではなく，李のプロテスタント改宗を朝鮮カトリック信仰史の延長線上で解釈する史料的な手がかりを提供しているとも言える。当時，日本の各基督教界雑誌と新聞は，カトリック受難史と関係のある李の家族来歴に関する陳述，また朝鮮カトリック迫害史に関する証言などを比較的に詳しく扱って報道した。しかし，朝鮮プロテスタント歴史研究者がこの部分を大きく扱ってこなかったことは，カトリックとの断絶意識，新・旧教の相互関係理解の脆弱さを如実に現わしたともみなすことができる。とにかく，李のプロテスタント改宗において，彼自らのアイデンティティは，朝鮮カトリック信仰史との関係を重要視した可能性が十分に残されていると言える。

一方，李のキリスト教改宗以後，日本での彼の活動の中で最も比重があり重要な業績は聖書翻訳作業である。しかし，これに関しては別の機会に扱わなければならないだろう。また，李は孫鵬九に続き，1883 年 8 月から 2 年の任期で東京外国語学校の教師を務めた。この職場のおかげで，李は日本で安定した生活を享受し活動することができた[18]。さらに，彼はアメリカのキリスト教界に朝鮮への宣教を請願する書簡を送り，これが宣教雑誌に載せられることで朝鮮への宣教師派遣を触発した面でも大きな貢献を果たした。

イエス・キリストの僕である私・李樹廷はアメリカの兄弟姉妹に挨拶させていただきます。(略)福音伝播の時代に，私の祖国はまだキリスト教の祝福を享受することができない世界の隅に置かれています。ここで私は，福音を伝えるために聖書を朝鮮語で翻訳しています。この仕事の成功のために日夜祈っております。『馬加福音』はほとんど終わっているところです。(略)皆さんの国はキリスト教国家として私たちによく知られています。皆さんが私たちに福音を伝えなければ，他の国が宣教師を送るのではないかと心配です。(略)皆さんが私の言葉に傾聴し，私の要請を承諾してくださると大いなる喜びであります[19]。

李のこの文章を，朝鮮に派遣された初期のアメリカ人宣教師は読んだに違いない。1885 年，朝鮮に到着した最初のプロテスタント宣教師であるアンダーウッド（H. G. Underwood），アペンゼラー（H. G. Appenzeller）などが朝鮮に渡る途

中，日本に寄って李に出会い，朝鮮宣教に関するオリエンテーションを受け，彼が翻訳した『馬加福音』を持って朝鮮に入ったということ[20]が定説になっている。

李樹廷翻訳の聖書

そして李は，在日期間中に東京外国語学校の教科書，学習教科書を含めて漢文小説『金鰲新話』の日本復刊に参加するなど聖書以外の著作活動においても功績を残した[21]。

1882年9月から李は約4年間日本に滞在した。帰国後の彼の動向は明かになっていない[22]。これも今後の研究課題としてあげておかなければならないだろう。

3. 李樹廷の活動当時における日本のキリスト教の状況

李樹廷が日本に滞在した期間は，1882年9月20日から86年5月28日まで[23]とされている。この時期における日本のプロテスタント・キリスト教界の状況をここで考察しておく必要があるだろう。当時のキリスト教界を理解する方法は，大きく二つのアプローチが可能である。第一に，導入されたキリスト教，つまり「宣教師中心の理解」，第二に，受け入れたキリスト教，つまり「日本人中心の理解」である。

まず，1873年2月に日本政府のキリスト教禁止「高札」が廃止された後，それ以前まで秘密裡に行われていた宣教師の伝道活動が自由化し，伝道団体の動きも積極的になっていった。1859年，初めて活動を開始した宣教団体である「PE」（Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the USA）を筆頭に，聖公会系宣教団体が三つ，同年に活動を開始した「PU」（Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church of the USA）などの長老派教会の団体が七つ，1869年から開始した「AB」（American Board of Commissioners for Foreign Missions），すなわち会衆教会係（組合教会）が一つ，1860年から開始した「ABF」（American Baptist Free Mission Society）などのバプテスト教会が三つ，これに遅れて1873年から活動を始めた「MEC」（Methodist Episcopal Church）などのメソジスト教会が三つ，その他に1876年から始めた「EA」（Evangelical Association of North America）など，福音系の諸教派の宣教団体が十四，それぞれ日本宣教に従事することとなった。李樹廷の活動時期を含めて，それから約10年後の時点である1896年までを考えると，初期のプロテスタント宣教を遂行した海外宣教団体は計31に至る[24]。これら各教派，宣教団体別に「ステーション」（station）を設置して日本での宣教活動を遂行したが，これらの中で特に「長監」（長老派とメソジスト教会）宣教師の中に李の改宗と聖書翻訳活動に直接，間接に影響を与えた人々が登場した。

しかし，日本のプロテスタント・キリスト教の歴史，特に李の改宗と彼の活動に影響をより大きく及ぼした「コンテクスト」（context）を理解するならば，日本の初期キリスト者を中心とする理解が重要な観点になってくる。実際，在日宣教

師の役割も大きかったが，李の改宗と意欲的な活動の助力者には，日本のキリスト教界の指導者たちが存在していた。

> 日本で最初にプロテスタント・キリスト教を受容した人々は大部分は，没落した武士たちであった。(略)彼らは明治期において政治的には不遇な境涯にあった。しかし彼らは，明治維新の中心勢力も，政治的には反対側でありながらも，日本の「近代化」を目指す点では，思いを同じくしていると漠然と考えていた。「近代化」をするためには，欧米の文明，文化を受け入れなければならないが，その西欧の文明はキリスト教を基盤として作られたものであった。そうだとするならば，キリスト教を先に受け入れた自分たちこそが「近代化」のパイオニアたり得ると，彼らがそう自負しても不思議ではないと考えられる。つまり，政治的に疎外されていた「武士階級」の中から現れた初期プロテスタント受容者は，彼らなりの情勢判断に従って，すでに日本の近代国家の目標は「近代化」と「西欧化」にあり，それは西欧文明の受容を意味し，それ故にその根幹をなしているキリスト教の受容は必須の過程であるとみたのだ。したがって，自分たちは政治的な疏外を経験しているが，先駆的にキリスト教を受容することによって，政治的領域においても新しい役割転換なしえるとの期待を持ったのだろう[25]。

すべてではないが，このような政治的な理由でキリスト教に対する積極的立場を取った人々も確かに存在していた。特に，日本のプロテスタント史の三大バンド（band）がよく取り上げられる。まず，西欧の宣教師が密集した場の一つである横浜地域を中心に，西欧文物とキリスト教に接触したグループが「横浜バンド」だ。このグループは，主に長老派宣教師との関連が特に深かった。そして，熊本に洋学校を建てたアメリカ人の信徒，教師であるジェーンズ（L. L. Janes, 1838-1909）を招待したことがきっかけとなりキリスト教グループが形成されるが，これが「熊本バンド」である。このグループは，特にジェーンズの帰国後洋学校の維持が難しくなると，新島襄が京都に設立した同志社にその根拠を移した。つまり，このグループは「会衆教会」系，すなわち組合教会と深く結びつくこととなった。そして，もう一つの独自なグループは，北海道の札幌農学校を中心に形成された。国立教育機関であった札幌農学校にアメリカ人教師クラーク（W. S. Clark, 1826-1886）が招聘されたが，彼は篤信なキリスト者であった。彼の影響を受けた農学校の秀才たちが独特なキリスト教信仰グループを形成したが，これが「札幌バンド」である。内村鑑三を筆頭に，「札幌バンド」の人々はほとんど「無教会系グループ」とつながっていく[26]。

もちろんこれらの中には純粋な求道者も多かったが，その一部には前述したようにキリスト教を受け入れることによる個人的な政治的立場の変化，大きくは日本近代化への貢献などを目標にする者も混ざっていた。しかし，これら政治的意図を持った人々の期待は，結局頓挫した。

> 明治政府の政策が「脱亜入欧」を目指して邁進していたことは確かであるとしても，より重要な精神は「和魂洋才」であった。すなわち，日本の近代の国家社会の流れは，キリスト教を受容したエリートたちの予想通りは展開しなかったのだる。しかし，それは「脱亜入欧」という近代日本の「ハードウェア」が，「ソフトウェア」，すなわち，精神的で本質的な価値目標と

して「和魂洋才」を採用したためであったと思う。そして，これこそ，明治維新を推進した人たちの高度な政治・宗教的戦略であった。近代日本が「脱亜入欧」へと進むなば，その西欧文明の根本である「キリスト教」もまた，優先的に採用していかなければならないはずだ。しかし，さらに「和魂洋才」へも進むということは，表面的には西欧の文明を受容するけど，新しい日本の近代文明の「内在」，すなわち，「魂」は日本固有のものとするという二元的な目標を設定したということであったと思う。これは，近代日本の国家目標が「脱亜入欧」であることを素早く見抜き，その根本であるキリスト教をまず受容することによって先頭を走り，政治的疎外を克服して，国家・社会の未来の主導権を掌握しようとしたキリスト教受容者たちの足元を大きく揺るがすものであったと考えられる[27]。

こうして初期のキリスト者の雰囲気はある程度再編された。つまり，政治的，世俗的な目標に邁進した彼らは，キリスト教活動の分野では消極的な姿勢をとった。あるいは，最初はそのような目標を持ちキリスト教に関心を持つ人々も徐々にキリスト教自体に，新しい宗教，信念，思想としてより高い価値を見つけて，純粋なキリスト教運動に参加するという方向の転換がなされた。特に彼らの多くは，知識人であったので宣教師の指導と教えにそのまま従うというよりは，日本の歴史的伝統，価値などを土台にしたキリスト教を受け入れる態度を示した。その代表的な事例が，宣教師グループ，宣教団体の教派，分派から大きな影響を与えられるよりも，日本の歴史的，地域的伝承と関連する特徴をみせたことである。そして，全く異なる教派や系列の影響によって，キリスト教に接触して改宗した者が独特な「エキュメニズム」を形成し，相互協力と連帯を作り上げていった。その代表的，また具体的な団体が李樹廷に最大の影響を及ぼした「日本キリスト教親睦会」である。

李の改宗と在日活動期における日本のキリスト教は，その後の「国家に適応するキリスト教」，「天皇制イデオロギーを積極的に受け入れたキリスト教」として歩む前段階であったことが確認できる[28]。

4. 李樹廷と日本キリスト教界の人物

1） 津田仙

津田仙こそ李樹廷の日本における活動，特にキリスト教改宗に最も貢献した者に違いないだろう。安宗洙の紹介によるが，津田仙との出会いによって李のすべての活動が遂行されたと言える。

津田仙は，1837 年 8 月 6 日生まれ。下総国の佐倉藩地域[29] の出身である。新しい文化に関心を寄せ，18 歳で東京（当時江戸）へ上京，当時日本と唯一の交易相手であったオランダに関心を持ち，オランダ語を勉強したが，その後すぐ英語学習にも力を傾けた。1861 年，津田初子と結婚し，彼女の姓を名乗った。1871 年には，明治維新以後，海外女留学生募集に八歳にも満たなかった次女の梅子を応募させるほど新しい文物輸入に積極的であった。

遂に，自らも 1873 年にオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会に参加する日本政府派遣団の一員として初めてヨーロッパ訪問に出た。まさにこの万博で聖書を見つけ，優れた西欧文物に心酔していった。

帰国後，米国メソジスト教会宣教師ジュリアス・ソパー（Julius Soper, 1845-1937）に会い，遂にキリスト教入信を決意した。1874 年 1 月 3 日，ソパー宣教師から洗礼を受けて，メソジスト教会

の信徒になった。彼にとって重要な事は，西欧の近代農業を取り入れる事とキリスト教伝道であった。この二つの目的を実現しようと，1875 年に東京麻布本村町にあった自宅に「農学社」を設立した。この機関は，キリスト教精神に基づいて，海外の近代農学を日本に取り入れることを目標としていた。

安宗洙と李樹廷もこの「農学社」を訪問し，李のキリスト教入信と受洗，そして活動の拠点になったのである。津田仙の「農学社」は，初期には高い評価を受けたが，日本近代化プログラムの急激な変化などから役割の中心地としての求心力を失い，設立 10 年で閉校となった。その後，津田仙は，日本キリスト教界の禁酒・禁煙運動に邁進し，著名な節制運動家として名声をあげた。1909 年 4 月 24 日に急性脳溢血のため召された[30]。

津田仙

2）　内村鑑三

内村鑑三は，日本で最も著名なキリスト教思想家の一人であり，朝鮮でも最も広く知られている日本のキリスト者である。特に「無教会主義者」として，彼の弟子たちも朝鮮でいわゆる「無教会グループ」を形成した。金教臣，咸錫憲などが彼の弟子として，彼らを中心とした雑誌『聖書朝鮮』の編集者や執筆者は植民地時代の朝鮮において「民族主義キリスト教」の中心的な思想の基盤を形成した[31]。

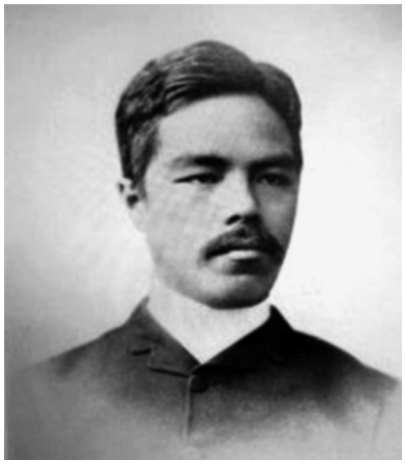
内村は，1861 年 3 月 23 日に上州の高崎藩[32]で生まれ，東京の小学校と外国語学校で学んだ。その後，国立札幌農学校第 2 期生として入学した。彼はここでキリスト者になり，1882 年に札幌独立教会を設立して，いわゆる「札幌バンド」の中心人物になった。

その直後の 1883 年，東京で開催された「日本キリスト教親睦会」で，李樹廷と初めて出会ったが，これが彼の朝鮮人と長年にわたる関係の出発点として考えられる。この時の李に対する印象が強く，親睦会プログラムの中で，1883 年 5 月 10 日の午後の最初のプログラムで，「空ノ鳥ト野ノ百合花」という題目の演説を行った[33]。

親睦会で李と出会った後，内村の記録に残った感想は，『内村鑑三信仰著作全集』に次のように記されている。

> その上，こんなこともあった。出席者の中に一人の韓国人がいたが，彼はこの隠遁的の国民お代表する名門の出で，これより一週間前に洗礼を受け，自国風の服装に身をととのえ，気品にあふれて，われわれの仲間に加わった。彼もまた自国語で祈った。われわれにはその終わりのアーメン以外はわからなかったが，それは力強いものであった。彼が出席していること，彼の言葉をわれわれが理解できないことが，その場の光景をいっそうペンテコステらしくしたのである。これを完全なペンテコステにするためには，ただ現実の炎の舌だけが必要であったが，われわれはそれを自分たちの想像力で補った。われわれの上に，何か，奇跡的な，驚くべき事

が起こりつつあることを，一同は感得した。われわれは，太陽がなお頭上に輝きつづけているかをさえも怪しんだ[34]。



内村鑑三

李樹廷に出会った体験は，彼にとってペンテコステの経験のようであったという感想が印象的である。

1885 年，内村はアメリカのマサチューセッツ州，アーモスト大学に留学し，1888 年の帰国後，多くの学校で教えた。そして，1890 年に東京第一高等中学校嘱託教員として赴任し，ここで「不敬事件」[35] が起こる。これはプロスタント初期における，近代天皇制イデオロギーとキリスト教の具体的な衝突事件とみなされるが，この事件以前と以後で日本のキリスト教史を分期してみることも可能である。

この事件において，個人的に大変な困難を経験した内村は学校を辞し，執筆と聖書研究，『聖書之研究』 発行と弟子の養成に没頭した。この頃，多くの朝鮮人が彼に師事した。彼の独特な「日本的キリスト教論」は，その後しばしば言及された政治的，国粋的意味の「日本的キリスト教」とは異なり，朝鮮のいわゆる「聖書民族主義」にも肯定的な影響を及ぼした。晩年には「再臨運動」にも傾倒し，1930 年 3 月 28 日に天に召された[36]。

3） 安川亨

李樹廷の改宗に最も直接的に，その形式や内容において大きな影響を与えた人物が安川亨である。『七一雑報』には「安川氏に就て仏教と聖教の異同を質問し終に去月二九日の安息日に東京露月町教会に於て安川氏より聖洗を受けられたり」[37] と記され，二人の関係が記録されている。安川は，李の信仰に関する質問に応答する教師でもあり，結果的に李に洗礼を授けた当事者であった。李に伝統的な東洋宗教の思想的背景を基盤に，キリスト教との接点（連結性）と独自性を見出させ，信仰的確信を植え付けた。さらに，西洋人宣教師から李が受洗する可能性も充分にあったものの，結局日本人牧師である安川が李の洗礼司式者になった。これは李の改宗と活動の中心に日本のキリスト者グループとの関係があったことを示していると言える。

安川は，下総国法典村[38] の富農家で出生した。一時，高橋家門の養子に入った事があったが，後に再び本家の安川家へ復帰した。宗教に強い関心をよせ，ギリシア正教会，カトリックを転々としながら学び，1873 年に米国長老会のデイヴィッド・トンプソン（David Thompson, 1835-1915）宣教師から受洗した。「日本基督公会」の一員となり，その後，1878 年 4 月には東京第一教会で牧師按手を受け，李樹廷が受洗した露月町教会[39] と品川の大井町教会の兼任牧師として働いていた。この頃，故郷である法典村の伝道にも積極的で，法典村教会を設立した。李が日本で活動していた頃の 1884 年からは，高知県伝道に出ることもあった。しかし，1888 年以後，築地美以教会（後に日本メソジスト教会銀座教会と合同）やドイツ普及福音教会などに移籍することになる。

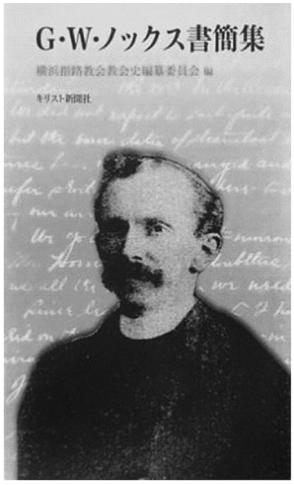
そのため初期に活発だった伝道および牧会活動が徐々に消極的な傾向をみせていった。1908 年 3 月 3 日に召されたが[40]，とにかく，安川は李の改宗と日本での活動の序幕を開いた瞬間に，決定的な役割を果たしたパートナーであった。

4） ノックス（G. W. Knox）とルーミス（H. Loomis）などの日本駐在宣教師

李樹廷の日本での改宗と活動には在日宣教師の助けが大きかった。宣教師もまた，隣国朝鮮に対する宣教の展望を考えるという意味でも大きな期待があった。李と関係が深かった代表的な宣教師として米国長老会宣教師のノックス（G. W. Knox）をあげることができる。

> 1883 年 4 月 29 日主日に，東京露月町教会でジョン・ノックス（John Knox）[41] 牧師の入会の下，安川亨牧師が洗礼問答をしたが，大変答えが明確で，ミスがなく，聞き取った牧師や立会った牧師が皆驚き，洗礼を施すことに全く問題がなかった。また，受洗するに値する資格者として認められ，荘厳な洗礼式を施すことができた。特に，日本で初めて施す朝鮮人への洗礼式であると同時に，朝鮮新教の先駆者になるマケドニア人の役割をする人物の洗礼式典であるだけに，宣教師と日本の基督教信者及び指導者たちを緊張させたのである[42]。

これは李の洗礼に，日本のキリスト者と在日宣教師とが関心を持って協力していることを示している。特に，朝鮮プロテスタントの開拓者としての李樹廷について意味深く考えていたのが，まさに在日宣教師であったということだ。実際，吳允台はこの本文に関する注釈で，ノックスがこの洗礼式の司式者であった可能性を指摘している。



ノックス（G. W. Knox）

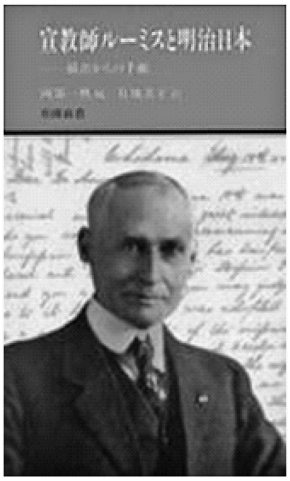
> ところで，Foreign Missionary によれば，Rev. G. W. Knox が洗礼式の司式者に間違いないと，筆者は立会の下と書いた[43]。

このように，ノックスは李樹廷改宗の重要な人物であった。 彼は 1853 年 8 月 11 日，ニューヨークで牧師の息子として生まれた。ハミルトン・カレッジ（Hamilton College）アーバン神学校（Auburn Theological Seminary）を卒業し，1877 年には米国長老会から日本の宣教師として派遣され，横浜指路教会で活動を始めた。明治学院の前身である「ヘボン義塾」の教師を経て，東京一致神学校の説教学教授として活躍した。一致神学校が明治学院大学の神学部となり，同大学の弁証学，説教学，牧会学教授になり，東京帝国大学でも哲学と倫理学を教えた。この頃（1883 年）東京で開かれた「日本キリスト教大親睦会」に参加し，李樹廷と交友関係を持ったとみられる。その後，1888 年にプリンストン神学校で神学博士学位を授与し，ニューヨーク・ユニオン神学校の教授を務めた。1911 年 6 月には，中国と朝鮮などで巡回演説を行ったが，その翌年の 1912 年 4 月 25 日の旅行中，朝鮮ソウルで急性肺炎のため

召された。李樹廷改宗と洗礼において大きな存在感を放ったノックスが，ソウルで亡くなった出来事も歴史的な意義を持つだろう。宣教師と同時に神学者であった彼は，『神学略説』(1884)，『説教学大義』(1885)，『基督神子論』(1886)，『神学提綱』(1890)，*The Development of Religion in Japan,* 1907 などを著書として残した[44]。

一方，李の改宗と洗礼，伝道意欲の動機誘発にノックスが深く関与したと考えると，李の最大業績である聖書翻訳作業に関しては宣教師ルーミス（Henry Loomis, 1839–1920）をあげなければならない。

米国聖書公会の日本駐在総務ルーミス牧師（Henry Loomis）と親しくなり，彼の要請で聖書飜訳をすることになったが，1884 年まで懸吐漢韓の『馬太福音』，『馬加福音』，『路加福音』，『約翰福音』，『使徒行伝』を飜訳し，その翌年である 1885 年には『馬加福音』を国文（ハングル）で翻訳した。そして，『路加福音』も翻訳をしたと言うがその飜訳書は光を見なかった[45]。



ルーミス（Henry Loomis）

ルーミスは，1839 年 3 月 4 日にニューヨーク州で生れ，アメリカの南北戦争当時，陸軍大尉として参戦した。終戦後，神学に志を抱いてアーバン神学校を卒業した。海外宣教に関心を持ち，宣教師になるための様々な教育課程に参加，同級生の三人が共に宣教師を志望し，牧師按手を受けた。一時的に健康を害して静養したが，1872 年に結婚と同時にアメリカ長老会宣教師として来日した。横浜に駐在しながら，ルーミスは日本人に英語聖書を，夫人は英語賛美歌を教えて宣教活動をし始めた。18 人の信徒と共に 1873 年 9 月に横浜第一長老公会（横浜指路教会）を創立し，初代牧師を務めた。牧会活動以外には賛美歌翻訳，本国の長老派教会の海外伝道支援事業の実務などを担当する中，健康状態が再び悪くなって 1876 年に一時帰国した。しかし，1881 年「米国聖書公会」横浜駐在幹事（日本事業総務）資格で再度来日し，その後の活動期に李と出会い，李の朝鮮語聖書事業を激励，支援した。さらに，宣教活動以外にもアメリカと日本の多くの農業関連事業などに携わり，1920 年 8 月 27 日，横浜で死亡，横浜外人墓地に葬られた[46]。

その他にも李は，在日活動期において日本に駐在したメソジスト教会のマクレー（R. S. Maclay, 1824–1907）宣教師と交友関係があったようだ。マクレーは，かつて中国の宣教師として大いに活動し，李の活動時期には日本のメソジスト宣教における責任者であった[47]。そして，彼は李との協力関係が持続した 1884 年 6 月に朝鮮を訪問，高宗を謁見した。その時，教育と医療分野に限定されたことではあったが，プロテスタントの朝鮮宣教着手の許可を受けるに至った[48]。米国宣教本部の政策とも関連があったが，このような在日メソジスト宣教師マクレーの積極的な朝鮮宣教事業開拓も李との関係を前提に見直しする必要性がある。

5. 李樹廷と「日本基督教大親睦会」（1883）

李樹廷と日本キリスト教について論議する時，最も重要な集会は「日本基督教親睦会」であろう。1883 年，第三回親睦会に参加した李樹廷は，朝鮮語で祈祷し，自分の信仰を告白した。そして，今も残っていて李の日本における活動，日本のキリスト教界との密接な関係を象徴する団体写真も撮影した。ゆえに，この集会に参加した日本のキリスト教指導者たちと李の関係を取り上げることによって，この論文の主題と目標はほとんど達成されることができると考える。

一般的に「日本基督教親睦会」と呼ばれるこの集会の正式名称は，「全国基督教信徒大親睦会」（General Fellowship Meeting for all the Protestant Christians of Japan）である。日本各地に散らばって活動するキリスト教の指導者が，2, 3 年に一度集まって数日間プログラムを共に準備し，親交を分かち合い，情報を交換する集まりであった。この集会は，1878 年 7 月に東京で初めて開催され，引き続き第二回は 1880 年 7 月に大阪で，第三回は 1883 年 5 月に東京で開かれた。その後，集会は 1885 年 5 月に京都で開かれた。キリスト教指導者たちが互いに相手の演説を聞き，自分の活動に新しい挑戦を与える機会でもあった。第四回の大会において，この集会が暫定的に取りやめになることが決められ，ロンドンに本部を置いた「万国福音同盟会」に加入をするため，この団体を発展的に解体し「日本基督教福音同盟会」を結成する事とした。この集会は，1883 年 5 月の第三回の東京大会に李樹廷が参加していた[49]。

この集会は，プロテスタント教会においてその歴史の初期段階にみられた代表的な「エキュメニズム現象」である。日本も各教派が先を争ってそれぞれの宣教事業を展開したことは周知の事実である。しかし，キリスト教を受け入れた各教派，各団体所属の日本人キリスト者は，日本の「コンテクスト」（context）を重視するという共通点を持ち，相互連帯と協力に努め，神学的にも土着的キリスト教会を目指したという点において評価することができる。特に，朝鮮の初期におけるプロテスタント教会が宣教師の主導によって 1905 年に単一教会設立をめざしたが失敗に終わり，結局初期キリスト教宣教活動が教派協力と連合の精神によって進められた，いわゆる「宣教エキュメニズム」[50] と，その主導勢力の特徴において正反対に比較されることとなるだろう。

李は，1883 年 5 月 8 日から 11 日まで開催された日本基督教大親睦会第三回大会に参加した。この大会の全般的なプログラムを 『七一雑報』は次のように報じている。

五月八日　火曜日　初日
午前九時ヨリ十時マデ「祈祷」新榮會堂
同十時ヨリ十二時迄「議事」同所
午後二時ヨリ二時半迄「歓迎演説」津田仙　同所
二時半ヨリ五時マデ「各地景況」同所

五月九日　水曜日　第二日
午前九時ヨリ十二時迄「議事」浅草會堂
午後一時半ヨリ「演説」於・井生村樓[51]
「論題未定」吉岡弘毅（東京）
「法律ト信仰ノ関係」海老名弾正（安中）
「聖書ト解釈」稲垣信（横浜）
「献身ノ説」金森道倫（岡山），（通倫が正しい。―訳者註）

「論題未定」上原方立（大阪）
「一身上ノ信仰」小崎弘道（東京）
「傳道論」新島襄（西京）（京都を意味―訳者註）

五月十日　木曜日　第三日
午前九時ヨリ十二時迄「議事」浅草會堂
午後一時半ヨリ「演説」於・井生村樓
「公ノ鳥ト野ノ百合花」内村鑑三（札幌）
「基督教教會の傳道」宮川經輝（大阪）
「論題未定」押川方義（仙台）
「責任論」杉浦義一（兵庫）
「人ハ万物ノ零」木村熊二（東京）
「荏弱者ノ勝利」伊勢時雄（今治）
「爾ハ誰ゾ」松山高吉（神戸）
「我國ノ神道，仏法遺存ノ道」平岩愃保（甲府）

五月十一日　金曜日　第四日
午前九時ヨリ「聖餐」新榮會堂
　説教者　新島襄
　執行者　奥野昌綱
午後一時ヨリ「懇談会」同所

五月十二日　土曜日　第五日
午前カラ「郊遊」飛鳥山邊[52]

この行事の公式スケジュールだが，李の場合は公式会員として招請されたわけではなく，彼の祈祷や信仰告白の表明などもすでに計画されたプログラムではなかった。特に，参加者名簿 39 人[53]の中にも見当たらないが，李がオブザーバーとしての資格で参加したとみられる。このプログラムに参加した多くの日本人キリスト者のリーダーたちの教派や地域分布を見ると，親睦会の広範囲なエキュメニズムの性格を充分に把握できる。多くの演説がなされる中，甲府出身の平岩愃保の演説主題が「我國の神道，仏法遺存ノ道」であった点を見ると，この集会の参加者が，また日本の伝統的宗教，文化価値とキリスト教のつながり，すなわち土着化に注目していた点もうかがえる。

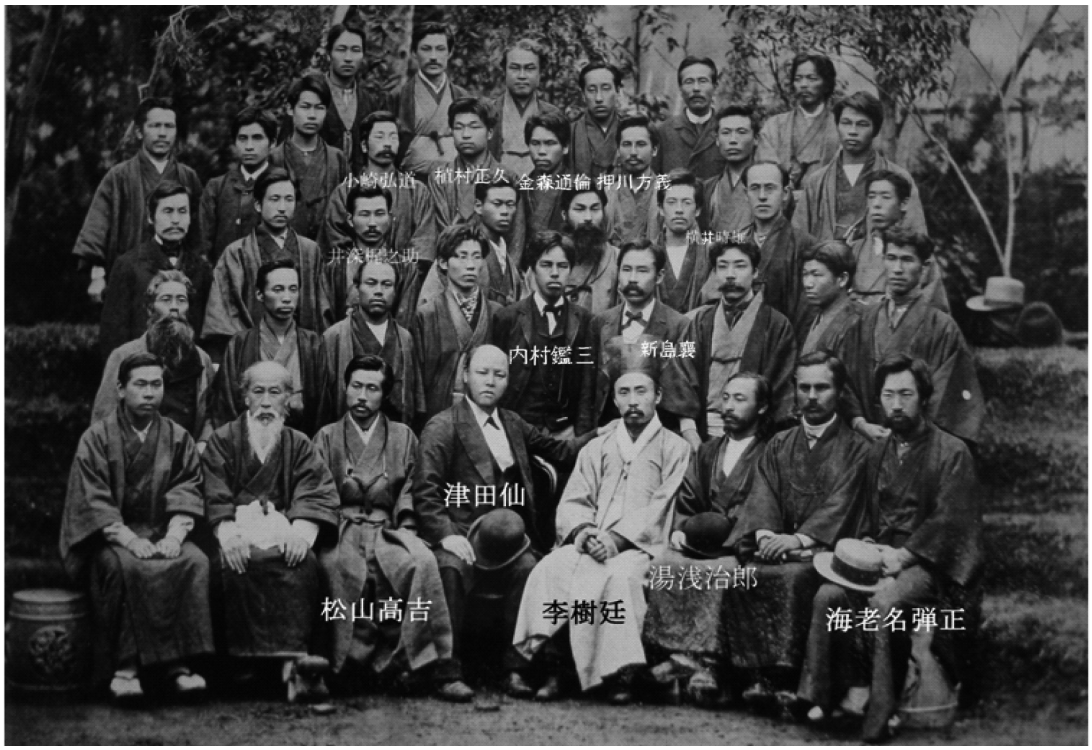
引き続き『七一雑報』の記事を取り上げると，李の登場は，大会四日目の 5 月 11 日の金曜日，早天祈祷会であった。

東京大親睦会記事，第四報：第四日（明治十六年五月十六日）午後八時祈祷会　会場新栄会堂司会上原方立氏〇讃美歌〇聖書朗読（羅馬書十二章）〇勧奨〇祈祷〇奥野氏の発議にて朝鮮人李樹廷氏に其邦語を以て祈祷する事を許す〇李氏祈祷〇会衆祈祷[54]

李は，この日の早天祈祷会に出席し，当日午前の聖餐式を執行する奥野昌綱の提案により，母国語で祈祷をしたと確認できる。彼は，日本の初代牧師の一人であり，日本語聖書翻訳委員であったという点から，李のその後の聖書翻訳活動とも関連があったのではないかと思われる。

李は，翌日の 5 月 12 日（土曜日），郊外で野遊会が予定さえている日の朝，大親睦会の参加者たちと東京九段坂の鈴木真一の写真館で，歴史的な写真を撮影した。その日の事情を吳允台は次のように記録している。

翌日は，1883 年 5 月 13 日[55]，東京九段坂鈴



木真一氏の写真館で全国基督教徒大親睦会の幹部らが撮影をしたが，全面の中央に李樹廷と津田仙が座り，二人の背後に立っている人物が内村鑑三である。これを見ても，李樹廷が日本全国代表からどれほど尊敬されていたのかが分かる。この日，すなわち5月12日（復興親睦会第五日目）の天気予報は，雨天で，郊遊が不可能であると予測され，5月11日に委員会が決定したことによると，明日（12日）に雨天となれば，大親睦会の場所を神田淡路町旭日楼に集まることと決定し，12日の朝8時に幹部一同が九段坂写真館で記念撮影をしたのである。しかし，意外にも午前9時30分から雨雲は消え晴天となり日光が当たったため，郊外へ出かけた。はじめ郊遊場所を決める時には，飛鳥山辺にしたが[56]，それよりも日暮里の修生院が良いという意見が支配的であったので場所を日暮里の修生院に移すこととなった[57]。

上記の写真が，当日九段坂写真館で撮られた歴史的な写真である。前列の韓服を着た人物がまさに李樹廷であることは言うまでもない。

吳允台によれば，日暮里で野外親睦会に参加した日，李樹廷が筆を執ってヨハネによる福音書14章をテキストに，信仰告白書を作成したと記録されている[58]。その内容は『七一雑報』，第8冊21号，1883年 5月25日付に載せられた。

李の漢文信仰告白書を紹介する前に，『七一雑報』の編集者は次のように李の信仰告白の意味についての説明している。

左の一編は去ることバプテスマを受けられし朝鮮人李樹廷氏が其信仰を言いあらはしものにて我等の愛し奉る仁慈深き天父の愛のかく速くに彼の國人に伝はりて今日此証文を視る事は実に喜ばしき至りならずや是は其往年欧米の兄弟か千里の波濤と打越えて我が日本に道を伝へよ

との神意にはあらざるか我愛する兄弟等よ李○の事について聊か考へあらまほし！[59]

続いて，李は信仰告白を表明した。彼は先述したように，ヨハネによる福音書 14 章 10 節の「わたしが父の内におり，父がわたしの内におられること」という聖書箇所に基づいて告白を展開したが，その内容の一部を紹介してみよう。

「（上略）…
天父在我我在父我在爾爾在我卽神人相感之理有信必成之確證耶蘇設譬曰我父爲圃人我乃眞葡萄樹爾爲此樹枝其理已直捷易解不煩穿鑿今僕更有何辭發明乎曰.（略）
盖神人相感之理如譬燈炷不燃卽無光燈炷是向道心燃然信心火爲神感故神感非由信心卽不可得徒有炷卽不成爲燈故不燈時終不見光不信時終不得救.（略）
神之在天如聲之在鐘擊卽響槌有聲鐘與槌雖具而各懸一處其有聲乎故燈以大炷燃卽光大鐘以小槌叩卽聲小卽多求多與小信小成之意惟無不成之理（略）故欲確知得救之成否只自省信心之有無莫問於師莫求質於神.（下略）」[60]

結局，これは朝鮮プロテスタント・キリスト者の最初の信仰告白文として神学的，歴史的意義が深いと言える。これらは，日本の初期キリスト者たちと李樹廷の間の深い交流から成り立った歴史的な出来事であったことを，再度確認することが求められるだろう。

一方，李が自分の信仰告白を要約した内容の一部を漢詩で著し，京都（当時は西京）教会の新島襄（同志社大学の設立者）に贈呈した原文が，現在も同志社の新島旧邸宅に保管されている[61]。

6. 結論
── 李樹廷と日韓キリスト教関係史の変遷

李樹廷は，朝鮮のキリスト者であるのみならず，日韓キリスト教関係史における最初の人物である。また，彼は朝鮮におけるカトリック，プロテスタント両者のアイデンティティを持った人物でもある。また，アメリカの宣教師による朝鮮宣教の開始を導き，初代宣教師の来韓に関与することで韓米キリスト教の仲介者としての役割も担った。結局，李は互いに異なる主体との関係を成立させる使命を果たしたのだ。

本論文は，特に李樹廷と日本のキリスト教との関係，さらには日韓キリスト教の初期関係史の観点に留意した。もちろんこの時期の朝鮮キリスト教の実体は存在しなかったが，李樹廷時代の日韓キリスト教の関係は肯定的なものから出発した。日本の初期のキリスト者たちは李樹廷を一人の実例と考えながら，自分たちにとっての宣教者として，さらに根本的にはキリスト者としての使命を見つけたと言える。しかし李樹廷時代，まさにその直後から日韓の歴史的に不幸な関係が始まり，日韓キリスト教関係史も暗黒期に入っていった。日本のキリスト教は，結局長い間，日本帝国主義の朝鮮侵略において先頭に立つ役割を果たしたのである。すなわち，国家に隷属したキリスト教として，総体的に国家目標を優先視する屈辱的なキリスト教会の特性を見せた。

しかし解放以後，一定の期間が経ち，日本のキリスト教は新しい覚醒時代に入った。特に，1967 年「日本キリスト教団」議長名義で発表された「第 2 次世界大戦中の戦争責任告白」以後，その動向は確実に変わった。これを基点として日本のキリスト教は，日本社会で苦しんでいる少数者へ

関心を示しつつ実践したが，その最初の対象者が差別を受ける「在日コリアン」であった。そして，その後，朝鮮の進歩的なキリスト教が民主化運動と統一運動に力を傾けた時代に，日本のキリスト教は新しい日韓キリスト教関係史を形成し始めた。朝鮮のキリスト教における正義を求める闘いに犠牲的な協力を惜しまず，あらゆる手段で献身した。この時期，日韓キリスト教関係史において歴史上第二，第三の李樹廷が登場し，彼らはまた日本のキリスト者の協力と同志として友愛を築きつつ自分たちの時代的使命を果たしていった。また，李樹廷時代には，彼が日本のキリスト者たちと日本駐在宣教師の窓口として，アメリカの教会に朝鮮宣教を要求したように，民主化，統一運動時代の朝鮮のキリスト者たちは，日本のキリスト教を窓口にして世界教会に向けて朝鮮のキリスト教の良き目標に対する理解と援助を求めることができた。

李樹廷時代には，肯定的な関係史により歴史の開始を見せた日韓キリスト教は，長年の桎梏の時代を経て，また新しい時代に第二，第三の李樹廷と共に新しい日韓キリスト教関係史を樹立して来た。このような観点から李樹廷と日本のキリスト教，日本の初期キリスト者との関係を考察することが最も有効な観点の一つと考える。

註

（1）「李樹廷訳聖書刊行 130 周年記念国際シンポジウム」（2015 年 6 月 30 日，東京）で発表したハングル論文（ハングル論文は『韓国キリスト教と歴史』，第 43 号，2015 年 9 月に掲載）を神山美奈子（関西学院大学大学院神学研究科博士後期課程）が和文に翻訳した。本文中参考写真も別に追加。

（2）『明治学院歴史資料館資料集』（第 8 集）「― 朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院 ―」，明治学院歴史資料館，2011 などを参照。

（3） 朝井佐智子，『日清戦争開戦前夜の東邦協会』，（愛知淑徳大学大学院現代社会研究科現代社会専攻）参照。

（4） 李承晩，「獄中伝道」，『神学月報』，3-5，1903 年 5 月；李光麟，「旧韓末獄中에서의 基督教信仰」，『朝鮮開化史의 諸問題』，一潮閣，1986；徐正敏，「旧韓末李承晩의 活動과 基督教」，『朝鮮基督教史研究』，第 18 号，朝鮮基督教史研究会，1988 年 2 月などを参照。

（5） 吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，惠宣文化社，1983。をはじめ次のような研究成果がある。；任展慧，「李樹廷の活動」，『日本のおける朝鮮人の文学の歴史』，法政大学出版局，1984；李光麟，「李樹廷의 人物과 그 活動」，『史学研究』，朝鮮史学会，1986 年 9 月，pp. 217-233；金요나，『朝鮮의 마게도니아 사람』，大韓イエス教長老会総会出版局，1994；金태준，「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」，『翰林日本学』第 2 巻，翰林大学校日本学研究所，1997, pp. 6-33；金혜숙，“殉教者李樹廷研究，”（誠信女子大學校教育大学院修士論文，2003）；金守珍，『朝鮮基督教先驅者，李樹廷』，図書出版振興，2006；李수환，『日本에서 朝鮮을 宣教한 李樹廷宣教師 이야기』，図書出版牧養，2012。また，李樹廷の聖書翻訳に集中した研究としては，全승민，“李樹廷의「新約聖書馬可傳」과「신약마가전복음서언해」의 對照研究”（延世大学校大学院国語国文学科修士論文，2014）；金秉喆，“李樹廷 譯刊 의「신약마가전복음서언해」研究，”『象隱趙容郁博士 頌壽紀念論叢』，1971；金成恩，『宣教と翻訳 ── 漢字圏・キリスト教・日韓の近代』（東京：東京大出版会，2013）などがある。

（6） 吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，pp. 45-47。

（7）『七一雑報』，第 6 巻第 47 号，1881 年 11 月 25 日。

（8） 李樹廷に関する内容が主に記されている『七一雑報』は，日本最初のキリスト教界雑誌である。1875 年 12 月に創刊され，1883 年 7 月に『福音新報』（関西）に改称し，また 1886 年 2 月には，『太平新報』になる。

（9） 李樹廷の名前の「廷」が「建」と誤記されている。

（10） 壬午の変（壬午軍亂）を意味する。壬午の変（朝鮮末期）の 1882 年，旧軍人の新式軍隊に対する不満と 13 か月滞った給料としてもらった米の中に砂がまじっていた事をきっかけにして起った変乱である。

(11) 閔泳翊の名前の「翊」も「翌」と誤記されている。閔台鎬の息子として，当時には「協辦総理内外機務大員」という官職に努めていた。

(12) 「韓人受洗」,『七一雑報』, 1883 年（明治 16 年）5 月 11 日，3-4 面。

(13) 李樹廷が日本人基督教指導者たちとともに撮った写真（本論文の第 5 章で該当写真を添付する）のメンバー，また李樹廷が参加した第三回日本基督教親睦会の参加メンバーに関しては，大会を詳しく報告した『七一雑報』(1883 年 5 月 11 日）に名簿とともに 39 人の参加者について記録されている。そして，この大会を後日記録した『同志社百年史：通史編　1』(同志社社史史料編集所編，京都：同志社，1979, p. 278）などには，参加者の人数が 32 名であったと記録されているが，これは大会期間が 5 月 8 日から 12 日まで数日間行われる日程であったので参加者人数の算定には若干差があるようだ。

(14) 金태준,「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」,『翰林日本学』第 2 巻，翰林大学校日本学研究所，1997, p. 9。

(15) 「天主教朝鮮に入事実」,『福音新報』(関西)，第 1 冊第 7 号，1883 年 8 月 14 日。

(16) 小川圭治・池明觀,『日韓キリスト教関係史資料』(1876-1922)，新教出版社，1984, p. 4。

(17) 「朝鮮信者の殺害」,『七一雑報』, 1883 年（明治 16 年）6 月 1 日，4 面。

(18) 『東京外國語學校沿革』, 1932；金태준,「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」, p. 14。

(19) "Rijuteis Appeel for Missionaries, Yokohama Dec. 13, 1883," *The Missionary Review,* vol. VII, 1884, pp. 145-146.

(20) 金태준,「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」, p. 9。

(21) 金태준,「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」, pp. 14-20。

(22) 吳允台は自分の李樹廷研究書の中で，宣教師ルーミス（Henry Loomis）の史料（*Friend of East, Things Korean,* p. 80）を紹介した。その内容は，「1886 年 5 月帰国したが，帰国するやいなや保守党につかまって全身がずたずた切られる刑罰に処刑されてしまった」という内容である。しかし，これに対して吳允台は言い切って，ルーミスを含む宣教師と日本のキリスト者たちが誤った言い伝えをきいて，記録したことであると主張する（吳允台,『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教伝来史　先駆者李樹廷編』, p. 270 参照)。これと関連して，吳允台はやはり間違った情報による誤解の所産であると断定したが,『明治学院 50 年史』に李樹廷を含む日本留学生グループの帰国とその即後，本国で処刑を残念がる追悼文を紹介した（吳允台，上記の書物，pp. 271-272 参照)。

(23) 金태준,「李樹廷，同胞의 霊魂의 救済를 위한 念願」, p. 6。

(24) 土肥昭夫,『日本プロテスタント・キリスト教史』(東京：新教出版社，1982)，pp. 11-14。

(25) 徐正敏,「植民地化とキリスト教」,『植民地化・デモクラシー・再臨運動』(東京：教文館，2014)，pp. 37-38。

(26) 土肥昭夫,『日本プロテスタント・キリスト教史』, p. 11。

(27) 徐正敏,「植民地化とキリスト教」, pp. 38-39。

(28) 日本のキリスト教が国家適応の姿勢に転換させた明確な時点に関しては，さまざまな立場があるが，発表者は 1891 年に至る「内村鑑三の不敬事件」をその基点とみる。つまり，当時代表的なキリスト者であった内村が，キリスト教信仰を理由に天皇の「教育勅語」に対する敬意を表する態度が不遜であったということが世間に知られ，日本国家社会で内村個人はもちろん，キリスト者全体を「非国民視」する排他的な世論が起こった事件以後を意味する。この時からキリスト教界の多くは，近代日本の国家体制とその根幹にある天皇制イデオロギーに順応して，具体的に日本の朝鮮植民統治を支持する態度を一貫させた。このような態度の転換は，朝鮮，朝鮮人に対する認識も大きく変わる展開を見せる。すなわち 1891 年以後の国家隷属的なキリスト教の朝鮮認識と，それ以前の李樹廷の在日活動期におけるキリスト教の朝鮮認識は格段異なる（土肥昭夫,「近代天皇制の形成とキリスト教」『天皇制とキリスト教』，東京：新教出版社，1996；徐正敏,『日韓キリスト教関係史研究』，東京：日本キリスト教団出版局，2009，pp. 37-47)。

(29) 現在の千葉県佐倉市。

(30) 『日本キリスト教歴史事典』(東京：教文館，1988)，p. 886；都田豊三郎,『津田仙 ── 明治の基督者』，大空社，2000；金文吉,『津田仙と朝鮮 ── 朝鮮キリスト教受容と新農業政策』，世界思想社，2003, などを参照。

(31) 徐正敏,「聖書朝鮮事件に対する新しい理解」,『キリスト教史学』(第 64 集，キリスト教史学会，2010. 7)，pp. 135-147 参照。

(32) 現在の関東地域である群馬県高崎市。

(33) 『七一雑報』第 8 巻，第 19 号，1883 年 5 月 11 日，9 面。

(34)　内村鑑三，『内村鑑三信仰著作全集』，第 2 巻（吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史　先驅者李樹廷編』，pp. 62-63 再引用）。
(35)　註(27)参照。
(36)　土肥昭夫，『内村鑑三』，日本基督教団出版局，1975；政也仁，『内村鑑三』，三一書店，1953 など参照。
(37)　註(12)参照。
(38)　現在の千葉県船橋市の地域である。津田仙とは同郷として親しい関係であったと考えられる。
(39)　現在の「日本キリスト教団芝教会」である。
(40)　船橋市教育委員会編，『安川家史資料目録』，1976；『日本キリスト教歴史事典』，pp. 1420-1421 参照。
(41)　吳允台は，自分の書物の中で「John Knox」と書いたが，実際には在日宣教師「George William Knox」を意味する。「John Knox」と記したのは，スコットランドの宗教改革者「John Knox」（1510-1572）の名前と混同した結果と考えられる。
(42)　吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，p. 61。
(43)　吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，p. 210，註32の内容の中で吳は他の項目を叙述しながら，「洗禮式を擧行する時，安川亨牧師とノックス牧師がともに行ったが，日本の記録によれば，安川亨牧師が執典したと記され，宣教師たちの報告書である『Foreign Missionary Vol. XLIII 1884-1885』の p. 149 には，ノックス牧師から受洗したと記されている」と紹介し，ノックス宣教師の役割をより強調した（同書，p. 68）。
(44)　『日本キリスト教歴史事典』，p. 1089 参照。
(45)　吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，pp. 68-69。
(46)　『日本キリスト教歴史事典』，p. 1510 参照。
(47)　http://en.wikipedia.org/wiki/Robert_Samuel_Maclay 参照。
(48)　徐正敏，『韓国教会의 歴史』，ソウル：살림，2003，p. 12 参照。
(49)　『日本キリスト教歴史事典』，p. 428 参照。
(50)　徐正敏，『韓国教会의 歴史』，pp. 14-15 参照。
(51)　井生村楼（いぶむらろう）は，明治時代に東京浅草にあった大集会用の会場である。政治，宗教の演説会場として利用された。1874 年（明治 7 年）東京浅草須賀町に井生村楼という貸席が建設され，東京の代表的な演説会の会場として利用された。1880 年 5 月に創立された東京青年会（東京 YMCA）も創立当初は頻繁に利用していた。1880 年（明治 13 年）8 月にはインド人牧師ナラヤンの「インドの過去・現在」という演説が，グイド・フルベッキと井深梶之助の通訳で大盛況を治めた。1880 年 11 月のクック宣教師の第 2 回学術講演なども開催され，1883 年には，第 3 回全国キリスト教徒大親睦会が開かれた。1887 年（明治 20 年）9 月，には旧自由党と立憲改進党合同の「大同団結大会」が開かれる（『日本キリスト教歴史大事典』教文館，1988 年，参照）。
(52)　「東京大親睦會記事續き」，『七一雑報』，第 8 巻第 19 号，1883 年 5 月 11 日，9 面。
(53)　『七一雑報』，第 8 巻第 20 号，1883 年 5 月 18 日，7 面。「議員名簿」参照。
(54)　『七一雑報』，第 8 巻第 21 号，1883 年 5 月 25 日，6 面。
(55)　5 月 12 日の誤記と考えられる。
(56)　註(52)参照。
(57)　吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史先驅者李樹廷編』，p. 63。
(58)　同書，pp. 64-67 参照。
(59)　『七一雑報』，第 8 巻第 21 号，1883 年 5 月 25 日，7 面。
(60)　「東京大親睦会記事，第四報」，『七一雑報』，1883 年 5 月 25 日，7 面。ハングル翻訳文は，吳允台，『朝鮮基督教史Ⅳ ── 改新教傳來史　先驅者李樹廷編』，pp. 64-67 を参照。
(61)　http://kidok.net/madang/content.php3?board=board36&uid=190&keyfield=&key=&bunho=36 参照。